

Nyctereutes procyonoides Chien viverrin Marderhund Raccoon dog Supikoira たぬき

狸
狸
貉
貉
猫
八
文
字

たぬきみち

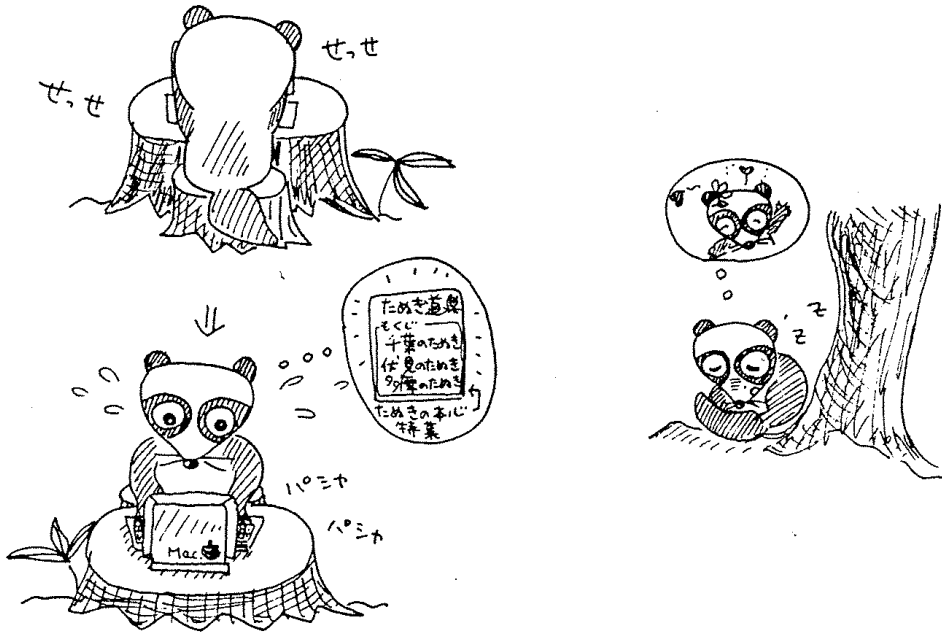


モ
ユ
ク
カ
ム
イ
マ
ミ

MARCH 1994
ISSUE NO. 4

TANUKI CLUB
THE RACCOON DOG INFORMATION NETWORK

род горной лисы Enotovidnaja sobaka Ussurijiskogo enota ムジナ



☆☆☆☆☆☆目次☆☆☆☆☆☆

I.	百狸の道も一狸から	佐伯 緑
II.	地域ニュース	
III.	狸囃子 (四)	加藤 輝治
IV.	Yさんの観察日記より	瀬川 也寸子
V.	フィールドノート欄外夢想 (2)	佐伯 緑
VI.	都会で増えるタヌキ (はばたき35号より)	村田 浩一
VII.	アナグマ観察中に見かけたタヌキ	金子 弥生
VIII.	1993年度日本哺乳類学会に参加して	福江 佑子
IX.	LATRINE BOARD・編集便り・著者紹介	

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



百狸の道も一狸から
佐伯 緑

生まれて初めて夜行性で過ごした冬はいつもより長く感じました。皆さんはこの冬をどう過ごされたでしょうか。野生生物の多くは、冬をまさに命を削る思いで乗り切ったのではないのでしょうか。冬眠をする者にとっても決して炬燵でぬくぬくということではないでしょう。その研究者は別として。イギリスで世話になったハリネズミの研究者は、研究するには冬眠する種がよい、冬に分析や論文書きができる、と言っていました。ホンダタヌキは冬眠しないようで、殆ど積雪のない房総のタヌキは結構動き回っていました。(分析どころかデータ入力も出来なかった。言い訳・口実・責任転換)

さあ、春です。『たぬきみち』は年四回、発行する予定です。原稿は随時受け付けていますが、3、6、9、12月に発行する為、当月の初旬がそれぞれの締切とさせていただきます。無料コピー機が私の住居から約50km離れているので、印刷・発送作業は私のフィールドワークのスケジュールの合間に出張(大げさ!)で行います。多少の遅れなどご了承ください。(原稿書いてくださいネ。)

ところで、この夏、親睦を深める為タヌキクラブ総会を房総(勝浦辺りを候補地に考えています。)において、予定しています。お忙しいとは存じますが、ちょっとした息抜きにご出席くだされば幸いです。詳しいスケジュール等は、次号の『たぬきみち』までに決定

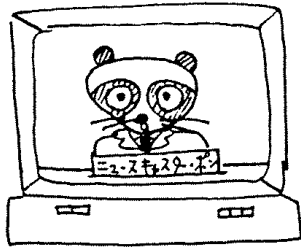
したいと思います。日程や場所についてご要望などございましたら事務局までお知らせください。費用はできるだけ掛からない方法を取るつもりです。遠方よりお越しの方には(無料)宿泊所も用意する意向です。

タヌキ文献要約集、TANUKIOLOGICAL ABSTRACTSは、リストと既存の要約の入力が終わったところです。テキストファイルなら大抵のコンピューター(又はワープロ機)で読める筈ですので、申し込まれた方でコンピューターにアクセスできる人はどうかその旨お知らせください。FDで発送したいと思っています。数十ページの印刷時間が省けますし、紙の節約が出来ますのでとても助かります。

(留守電及びFAXは0475-44-1691で24時間受け付けています。ハガキでも結構です。)TANUKIOLOGICAL ABSTRACTSは、随時成長していく性質のもので、言い換えれば常に不完全であります。索引、キーワード等は、私の時間の許す限り仕事を進めて行き、記載洩れや新しい文献もできるだけ拾って行くつもりです。が、何分事務能力が体力の半分もない人間がすることですので、改訂版を年一回、その時点での出来上りで発行したいと思っています。どうかその旨ご理解ください。

百狸の道も一狸から(?)と申します。私がすれば何事も狸知的にことが進み、狸路整然とした仕事になってしまい、何かと当初の思惑からずれることもあるかと思っています。屁狸屈(臭そうだなあ)はこの位にして、これからもタヌキクラブを盛り立て頂くよう宜しくお願いします。





地域ニュース

(第三種郵便物認可) (PRのページ) 読者 1993年(平成5年)11月16日(火)



ストロボは、警戒心を強める白熱灯の代わりに赤いランプを使用。赤い光が雪とタヌキのひとみに映り、とても美しかった

首都圏で見かける野生動物のニュースで、何といっても多いのがホンドタヌキだろう。一九九〇年三月、東京に大雪が降った日があった。雪と月明かりのある日は、野生動物の撮影にとって絶好のチャンス。自然のままでも十分薄明るいから、双眼鏡さえ持っていれば照明なしで相手の姿がはっきり見えるのだ。

この日は「雪中のテン」を撮影するつもりで、檜原村に車を飛ばした。ところが、本命以外の思いがけぬ収穫があった。それが写真のホンドタヌキ。

途中の林道に車を止め、三脚にのせたカメラはドアの外。相手に警戒されないように、窓の内側に目隠し

首都圏の動物 こんなところに

ホンドタヌキ

月夜の山中 愛らしい姿

用に張ったカーテンから頭だけ出し、夜中の十一時過ぎから寒いのをこらえながら待機していた。

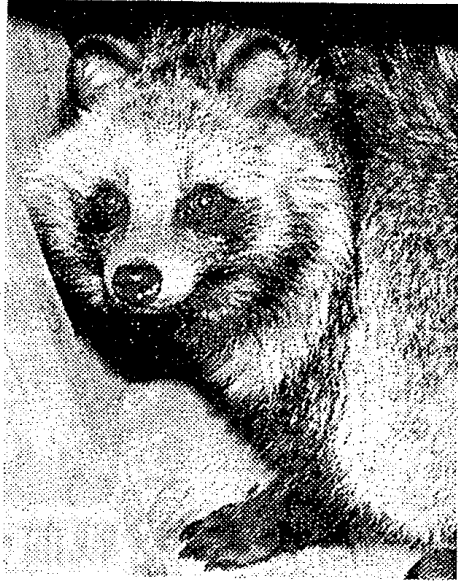
雪に反射する薄明かりの中にひときわ引き縮まったタヌキの姿。ふさふさした毛もかわいらしく、思わず予定外のシャッターを切りまくった。

タヌキは、何かにひどく驚いた瞬間、一時的に気絶する習性がある。それを知らずに、例えばトラ狭みに捕まったタヌキを、死んでいると勘違いして外してやると、急に元気になって逃げられてしまうことがある。小心で愛嬌(きょう)のあるタヌキが「人を化かす」と言われるのは、こんなところに根拠があるようだ。(写真と文 動物写真家・久田雅夫)

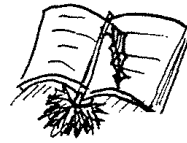
水族館でタヌキ!

銚子

銚子市の水族館「犬吠埼マリナーパーク」に二十日、一匹のタヌキが仲間入りした。写真。といっても、公開はしていない。十九日夜、近くの漁師宅に迷いこんできたのを住人が網で捕らえた。水族館では持ち主がいれば、返したいという。あまりの愛らしい顔に、女性の飼育者からは「水族館のマスコットにしては」との声も。



タヌキは後ろ脚をけがしており、やや引き気味に歩く。回復すれば、動物園に引き取ってもらおうか、自然に返すかも決めるといふ。



12/28/73



▽子タヌキ いてきた。

キをいじめ、犬の加勢に力を得た子タヌキが、ウサギの頭にかみつくといい一幕も。昔話の「力子力子山」とは違ったタヌキの逆襲が、イヌ年の来年も続くかどうかは、犬の動向にかかっている。

にはぐれてい
 るのを保護さ
 れた。さくの
 中で雌犬にな
 つき、懐にも
 ぐりこんで甘
 える。この仲
 をしつとした
 のか、先住者
 のウサギが背
 中に飛び乗っ
 たり、けった
 りの乱暴を働

女の気持ち



「たれや」
 私は怖さに一声を發した。食卓の下で、かすかに聞こえる息づかいがサツと消えた。私は台所に布団を持ち込んで寝ていた。明かりをつけると、網戸が一寸ほど開いていたが、眠たさにそのまま寝てしま

った。
 次の夜、シリシリと網戸を開けている音に目が覚めた。昨夜と同じ午前二時。イタチだと思い、息を殺して近寄り、開きかけの網戸を一息にサツと開けた。はやる心と裏腹に、その動物はヨタヨタと短い脚で表の方へ帰って行くのである。犬のようなスマートさもなく、また急いで逃げるで

タヌキ

もなく、背中黒っぽさを印象つけて消えてしまった。
 夫が帰るなりこの話をすると、ヨタヨタ歩くのはタヌキだと言う。私は裏山にタヌキの出た話など一度も聞いたことがなかった。「戸締まりしっかりせんかい」と夫に一喝され、それ以後の事は分からない。

秋に入り、交通事故死のタヌキを度々見かけるようになった。勝手口からの夜の訪問者はやはりタヌキだったのだ。不作は山住まいの動物たちにも影響しているのだ。暗やみの和泉山脈を眺め、この広く遠い山から食べ物を求め下りて来るタヌキ、いかにも哀れでならない。



「今日までのご好意で、有り難く」

加藤 輝治

中国は東北部の極寒の地で、日本軍の兵隊の身を守ったのは、外套の裏に張りつけられた獣の毛皮だった。ウサギ、ヌ、トリア、テン、タヌキ、キツネ、イヌ、ネコ、しまいには奉国婦人会の襟巻まで駆り出された。

「俺のこれは何じゃろな。」と、戦地では獣当てが妙な楽しみとなっていたくらいだった。中でも防府の離島、向島のタヌキはいちばんひどい目に遭った。あろうことか師団長閣下が「向島のタヌキの毛質は日本一」と折り紙をつけてしまったのだ。昭和の初めに二万頭はいたのがこれで一べんに千代にまで減ってしまった。(減りだすと戻すのは難しい。現在は二百頭も数えられない。)

この話を長編にと取り組んでいる最中から奈良は高畑の閑静な住宅街に住んでいる叔父の一家はずいぶんと協力的だった。彼は、フィリピン沖の熾烈な海戦で沈没した空母「瑞鶴」の生き残り、まもなく七十歳を迎える元少年水兵だが、今は訪れる外孫に夢中の好々爺となっている。長男は四十歳の晩婚でまだ内孫誕生の兆しがなかったのだ。

「志賀直哉邸へ登る道がありますやろ。四匹の親子連れて目がきんきん光ってびっくりしましたで。」その長男が知らせしてくれたのだ。

奈良ホテルの厨房がお目当てらしくさかんに道路を横断する一家を教えてくれたのは建設設計の次男だった。不幸にも車にはねられた一頭のこととは即刻一〇番してやったという。いづれも私はその度にカップエビセンを持って現場を訪れている。奈良ホテルでは常務の〇さんが、

「皇族来やはる度にこれやりませんなんねん。」と苦笑しながら、ため糞をけずり取っていた。

当の叔父が気色ばんで電話してきたのは、正倉院横の尼寺のこと

だった。親戚の法事で、夜遅く帳場を終えた叔父たちがほっと一服をやっているとき、この主とも思えそうな巨大なやつが前を堂々と通り過ぎ庫裡の裏へ消えていった。

「今晚の折詰の残りを楽しみに出てきよったのやろけど、あんまりでっかいので皆、声も出せへんかったで。」

私は早速、あくる日、寒々とした月に照らされワンカップ大関で暖をとりながら墓石の間にひそんでいた。九時ごろ山門がきしんだ音を立てて開いたとき、急に不安が頭をもたげた。庵主さんには断つてあるが夜の訪問客は私のことは知らない。おぼろげな月光下三メートルの距離で立った相手は死ぬかもしれない。十メートルのところ

で墓石から静かに立った私はにこやかに「今晚は。」と言った。一瞬の佇立の後、客は茶羽織と草履の片方を残して山門へ消し飛んでいった。

相変わらずのにぎやかで辺り迷惑な私の取材の末、タヌキの長編が陽の目を見た同じ頃合に、なんと高畑の家の裏庭に五頭の一家が通いはじめ、又、晩婚の長男夫婦にあきらめていた赤ん坊の誕生を見た。私は叔父夫婦によってコウノトリ並の厚遇を受けた。

「ほんまにお前ら孫を連れてきてくれたかしらん。」叔父は、冬をひかえ丸々と大きな五頭に食パンを投げながら言い、嫁に抱かれた赤ちゃんは、ベランダにまで来る獣にのどを鳴らして喜ぶようになった。

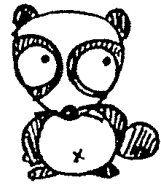
私にまで幸せな気分がうつり、深夜仕事の合間に長男が写したもう一組の五頭の一家の写真を微笑みながら見ていた私は、その時、背筋の凍るような思いに襲われた。その足で奈良に駆けつけた私はガウン姿の四人の大人に言っていた。

「お乳の匂いがして、タヌキにとってこんなご馳走はないが。どうかもうパンやらんといてや。裏庭へ寄せつけやんようにしてや。」大人たちの表情はさっと変わった。

帰り道、ハンドルを握りながら恩知らずの私は、一心にタヌキ一家に心で詫びていた。



“ Yさんの観察日記より ”



○月×日

仕掛けたビデオに タヌキが うった。それからというもの タヌキのおもしろさに とりつかれてしまった。

「あー もっとしっかり見たい」そこで外燈を増やすことにした。外燈のコードを地面にはわせたままだった。その日の行動は実におもしろかった。

2匹のタヌキはいつものように いつもの獣道からトットトットとやってきた。ところが だ。コードの手前 40cm くらいのところで いきなり ハッと立ち止まり スズズと少し後ずさり。でもそのあと一歩踏み出し、少しコードに近づく。でも また スズズと後ずさり。鼻先は しきりに前に上に首を上下しながら動かしている。気持ちには前進したい。でも怖い。こう思ったかどうかは知らないが 腰は ヘビリ腰スタイル。でも首だけ思いっきり前へ伸ばしている。なんともヘンテコな格好だ。2匹とも え〜3分同じ行動をした後、コードのない方向からぐるっとまわり、いつもの桜の木の根元を鼻づらでフガフガとあさり。いつもよりおちつかない様子で昆虫をほんのちゅと食べ。そそくさと林の中へ消えていってしまった。

次の日は前日より コードに接近。でもその日は何も食べずに帰って行ってしまった。次の日、コードを高い位置にかえ。タヌキ達の視野に入らなうようにした。すると、何事もなかったように スタスタとやってきてその日はおちついて餌をあさっていった。

以前、別の所で観察していた時には 空びん や机、かごワナなど、を順番に設置したが、その新しいものに慣れて そのものに触れるところまでいくのに最低でも1週間かかった。しかし2週間程あればそのものの位置が変化したり危険がない限り、完全に慣れてしまう。四々しいくらい スタスタと全く警戒せず、平気になってしまう。こうだから本当に時間さえあれば つかまえるのは簡単だ。ただし、やはり必ず頻繁に利用する場所である必要があるが、(注) 皆以御存知であるとは思いますが タヌキをつかまえるには必ず捕獲許可証が必要。))

人間にも こういうタイプは けっこういるなと思ってしまう。慣れとは恐ろしいものだ。この手の人は案外、はめられやすい。だまされやすい。でもどこからホッとすればいい人が 多いように思うが 私の思い違いだろうか(?)

先日、タヌキのDaphneをテレメで追いかけていた時のこと、私が農道にいと彼女がアズマネザサの藪のなかでゴソゴソと近付いてきた。アンテナを外し接続コードだけで受信機の針が振り切れるほどになったので近くだと分かる。ガサゴソガサゴソガサゴソ・・・一瞬止まり、「ブシュン！」そして又ガサゴソガサゴソ。タヌキのくしゃみを聞いたのは初めてだった。今回は野生生物との遭遇について書いてみたい。

一般に哺乳類はshyである。アメリカの国立公園で調査中、子鹿をあわや踏んづけそうになったことはあるが、これはヒトを見たことがないのと、そのじっとしている習性からだ、大台カ原などでヒトを見て寄ってくるシカは特殊であると思う。上記の子鹿はtwinのオジロジカで、親鹿は10メートル程離れたところで前足を踏み鳴らし荒い息を鼻からシュッシュュッと吐いて警告していた。が、子鹿は呑気なもので、二頭共円な瞳で奇妙なモノ(=二本足の平たい顔の動物)と見つめ合っていた。

野生生物と遭遇するには、人の行かない所で人の行かない時間に長時間居れば、その確率は高まるが、侵入者としての自覚と節度ある行動が必要最低限のマナーであろう。調査だ研究だと言って大きな顔でつかつかと野生の地に踏み込むのは、本末転倒である。野生生物観察にも不確定性原理は適用される。観察者(測定者)が観察もしくは測定しようとする、その対象はもはや観察(測定)しない時の状態ではなくなる。テレメなど、電子の位置と時間とを同時に測ろうとする無駄な努力にも似て、確率でしかものが言えないのではなからうか。

理屈を捏ねてみても、やはり思いがけない野生生物との遭遇が、野外研究の清涼剤であることは否めない。植生食痕調査をトランセクト法(決められたラインに沿って調査を行う方法)でやっていたとき、丁度ライン上の根株でアカリスが食事中だった。そのリスもヒトを見たことがなかったのだろう。「すみません、通りますが・・・」と2メートルもの至近距離で話しかけても無視され、食事が済むのを待っていたことがある。またある時は、コヨーテの巣穴の近くを偶然通りかかり、ヤップヤップという仔の鳴き声を後に、心を残しながら立ち

去った。ちょっとしたことが、単調な肉体労働に疲れたフィールドワーカーの心身を安らわせてくれる。(糞一つ足跡一つで喜ぶ人種がこの世に少なからず存在する。)

テレメはリモートセンサスの一種で、離れた所から位置などを測定する方法ではあるが、たまに追跡個体と出会うことがある。イギリスのワイタムの森では、追跡中のアナグマがエサ探しに夢中のあまり私に気がつかず、どんどん近付いてきてとうとう足元まで来てしまった。私はアンテナを枝に自分は幹になったつもりでFREEZE!(忍法、私は木。)漸く気づいたアナグマは、グブッとブヒッと形容し難い声をあげて方向転換ダッシュしたが、15メートルも行くともたエサ探しに鼻を地面に着け歩き出した。アナグマのその夜のスケジュールに影響を与えなければよいがと思った。又、或るキツネの調査では、休息場所を確かめようと静かに忍び寄ったところ、眠るキツネにうっとり感動するあまり、場所をはっきり覚えていなかったことがあった。しかし、その丸まって顔を半分尾に埋めた姿は、今もありありと目に浮かぶ。

野生生物研究者は、何の為にフィールドワークをするのだろう。

観察会などで都会の人々が、お手軽に野生動物を見たいとおっしゃるのを私は贅沢だと思う。と、同時に研究者だけがその特権に甘えるのはどんなものだろうか。日本人は、棲み分けか何かは知らないが、ここは人間のもの、野生生物は山奥に住むものと決めてかかって、鼻っから共生なんて頭に無い。そして、野生動物との遭遇を軽んじたり、あるいは特別視する。確かに、野生生物は簡単に見られない。けども、そこに、あそこに、居るのだ。(私の『野生生物』と『野生動物』の単語の違いは、生きるものと動くものの違いです。)自然環境及び状況の“自然さ”と観察者の謙虚さと鋭敏さがあって初めて、野生生物のあるがままに近い状態の知覚が実現し得る。

野生生物研究者は、何の為にフィールドワークをするのだろう。

解りません。

好きだから? 理解したいから? 保護に必要だから? 成り行きで? 形而上学的に? 形而下学的に? 科学に貢献する為? 自己研磨の為? all of above?

解りません。

遭いたいただけかも知れない。

イヌの特集Ⅱ

都会で増えるタヌキ



白川原の雑木林に現れた子タヌキたち。市街地でも容易に繁殖できるのがタヌキの特徴である。

最近、都会派タヌキの話題が多くなりました。開発などで自然がしだいに失われてゆく現代ですが、身近に野生動物の息吹を感じれるのはうれしいことです。は、なぜキツネではなくタヌキが都会に増えているのでしょうか。

タヌキは雑食性で、特殊なすみ場所を要求せず、なわばり性も強くありません。つまり、なんでも食べ、どこでも誰とでも暮らせるタイプの動物なのです。そのような動物にとって、残飯が豊富にあり、けもの道の代わりとなる側溝が張りめぐらされた都市は別天地なのでしょう。さらに、自然に飢えた都会人は餌付けまでしてくれるのです。

しかし、都市で暮らすことに問題がないわけではありません。たとえば、動物園で保護されるタヌキの数は年々確実に増えています。そのほとんどは交通事故が原因です。犬の病気であるジステンパーや伝染性肝炎、そして疥癬(かいせん)症にかかっているタヌキも増加しています。都会の中に新たな生活場所を見つけたタヌキですが、これからは野山にはなかった都会特有の危険と闘っていかなければならない苦勞も背負っています。



交通事故で前足を骨折したタヌキ。このような事故で保護されるタヌキは、毎年その数を増している。



タヌキが都会でくらすてゆくのも楽ではない。新聞にも事故や病気の記事が多く見られるようになった。



アナグマ観察中に 見かけたタヌキ

金子弥生

調査地内の神社の社務所で、アナグマの十年近い餌づけと、床下での繁殖が行われてきており、1990年の夏から観察をさせてもらうことにした。餌づけ場には、アナグマの他にもタヌキ、キツネ、ハクビシン、ノラネコなどの種が現われていたが、中でもタヌキの頻度は高かった。にもかかわらず識別することさえ思いつかずに、ずっと大小2匹のタヌキが来ているものと思い込んでいた。文化庁の池田さんに、尾の模様の違う3匹が来ているということを教えられて、はじめて気がついたような調子であった。そして「ボテ」「チョロリ」「ショボ」という名前をつけた。

一番餌づけ場に頻繁に出入りしていたのは大柄ですばらしい毛並みをしたタヌキ、ボテであった。1990年、彼はアナグマ達に脅されながらも餌をかすめ続けた。そしてアナグマが稀にしか来なくなる10月ごろからは毎日せっせと通い続けた。それも決まって8時25分前後に現われた。懐中時計でも持ち歩いているような正確さは、行動パターンが安定していることを予想させた。しかしボテの幸せも長くは続かなかった。1991年3月に、チョロリやショボが現われはじめた。2匹の出現時刻は不安定だったが、いつも一緒に行動していた。テレメトリー調査のために車の中で夜明かししていると、じゃれるようにして仲良く車の前を走って行ったりした。ボテは別行動だった。ボテはチョロリやショボと餌場で出会うと唸り、しまいには喧嘩になった。

チョロリがオスで、ショボがメスだと分かったのは、彼等が子供を連れて来てからだだった。彼等はなんと4匹の子タヌキの親となっていた。タヌキのペアの仲の良さは想像以上だった。チョロリが餌場の様子を探りに来て、アナグマのいないことを確かめてから、ショボを連れてきて食事をするというような光景も見られた。それにひきかえ母親アナグマは、5月～6月にかけてずっと単独で子育てをしていた。オスは、誰が父親のかなどという推測を全く拒絶する無関係さで餌場

に登場し、たらふく食べるとさっさと帰っていった。似たような食性ではあるが、社会システムは随分異なるのだ。

6月に入ると、8時台の餌場は5～6頭のアナグマ、7頭のタヌキで混みあうようになっていた。アナグマがやってくるとタヌキ達は譲るより仕方がなかった。しかし決して諦めたりはしなかった。親子揃っていつまでも待ち続けるのだ。タヌキの取り分は明らかに少なかった。7月、ショボは餌の器に匂いづけまでしたが、アナグマには効果がなかった。ショボとチョロリはアナグマの現われる方向に見張りをつけて交互に採食するようになった。そして8月、タヌキ達はもっと有効な手段を考え出した。私と同じくアナグマ派の社務所の奥さんが、「餌を出すのを明るいうちから来て待ち構えているのよ。タヌキの餌じゃないのにねえ。」と嘆いていた。時間的すみわけと呼ばれる適応行動だ。「なかなかやるじゃない。」私は感心した。

冬に入って、ふらふらのタヌキが社務所の庭をうろついていたという話を聞いた。しばらくして床下から干からびたタヌキの死体が見つかった。他にも数頭の死体が発見された。当時流行していたジステンパーの影響だった。餌づけ場には翌年何も来なくなってしまった。

不思議なのは、タヌキの病気の報告が圧倒的に人家にふらふら迷いこんで来た状況で入ることだ。なぜ人家に出てくるのか。擬人的に考えると助けを求めているのだろうが、人間が触っただけで仮死状態になってしまうこともある程気弱なタヌキのことである。Cheesemanらのアナグマの研究で指摘されたように、タヌキも病気個体はファミリーの行動圏からはずれて、巣穴も異にして行動するようになるのだとすれば、死を察して仲間迷惑をかけないように、一番嫌いな所で死ぬのでは、と思ったりもした。あるいは、意識が混濁し視力も衰え、たまたま明るく食物の匂いのする方向へ寄ってってしまうというだけなのかもしれない。こういう部分はテレメトリーから推測するには限界がある。不思議な点はますます増加する。またタヌキの観察がしたい。

1993年日本哺乳類学会に参加して

福江 佑子

ちょっと前になりますが9月27日から9月29日にかけて、哺乳類学会1993年度大会へ行ってきました。本年度の大会はリンゴで名高い青森県の弘前大学で開催されました。青森のリンゴが一昨年の台風で被害にあったのは記憶に新しいことですが、今年は冷夏による米の凶作。私が学会へ出向いた時期はちょうど稲刈りの頃だというのに、ほとんどの稲が放置された状態でした。

さて本題の哺乳類学会ですが、この学会は哺乳類を対象として、生理、形態、系統、行動、生態など幅広い発表が行われています。今回は99の一般発表(ポスター、口頭)がありました。われわれタヌキ関係は、行動、生態関係が2つ(私自身の宣伝になってしましますが)、環境科学関係(?)が1つでした。環境科学関係の発表は、タヌキの組織、器官の重金属の定量測定を行ったところ、骨中に鉛濃度が非常に高い結果が得られたというちょっとショッキングな発表でした。これはタヌキのどのような生態的特性が影響しているのか、知りたところ。このタヌキの重金属蓄積の研究をなさっている愛媛大学の伊藤さんには、いつかこの紙面でもう少し詳しいお話しが聞けたらと思います。

今回は、初めてタヌキ関係者(アナグマ含む)が8名(多いのか少ないのか?)集まり、簡単に昼食会を開きました。自己紹介のあと情報交換や研究の方法論的な問題点など、中型哺乳類ならではの話がなされました。来年の学会でも開く予定ですので、ぜひタヌキの昼食会(タヌキ汁でも食べそうですが)にも参加してください。

学会への参加は、私にとって勉強になるのはもちろんのこと、研究、調査への活力を与えてくれます。しかし今回最も印象に残ったのは、会場で食べ放題だったリンゴとリンゴジュースだったような(?)。

LATRINE BOARD

1994. 4. 6-8. 6th Symposium on Issues and Technology in the management of Impacted Wildlife, Hotel Colorado, Glenwood Springs, CO. (Carol Knepp, 303/499-3647.)

1994. 5. 31-6.4. 1994 World Congress on Tourism for the Environment, Puerto Rico. (World Congress on Tourism for the Env., PO Box 877, Silverton, OR 97381. 503/998-3772.)

1994. 6. 7-10. 5th International Symposium on Society and Resource Management, Colorado State Univ., Fort Collins, CO. (Michael J. Manfredo, Program Chair, Human Dimensions in Natural Resources Unit, Colorado State Univ., Fort Collins, CO 80523. FAX: 303/491-2255.)

編集便り

里タヌキが 一頭 捕まりました。1ヶ月足らずの間に 数回 目撃。山タヌキは 「ほかほか」 見れたい... のと 比べて ヒトの臭いにも 慣れりにも 慣れり いる よう です。でも 赤い 糞に ちびと あらって ヤブや 刈草に 入っていく 様子は 「ちびとー どーして こんな 時間には ヒトが うろついている - !? 」 と いう 感じが しました。 (2)



著者紹介

佐伯 緑(SAEKI, MIDORI)=オックスフォード大学野生生物保護研究ユニット。

加藤 輝治(KATO, TERUJI)=日本ペンクラブ会員。日本動物愛護会会員。

瀬川 也寸子(SEGAWA, YASUKO)=森林総合研究所関西支所・鳥獣。

村田 浩一(MURATA, KOICHI)=兵庫県神戸市立王子動物園・獣医。

金子 弥生(KANEKO, YAYOI)=東京農工大学大学院農学研究科・博士課程2年。専門はアナグマの生態研究。

福江 佑子(FUKUE, YUKO)=東京農工大学一般教養生物小原研究室・博士課程1年。

タヌキクラブ事務局

〒299-44 千葉県長生郡睦沢町寺崎1306

TEL&FAX 0475-44-1691

郵便振替口座 大阪8-251165